

詩語における blanc の問題

金 田 晋

一、現代文芸学は一九二〇年代以後、文芸作品の多層構造化を明らかにすることによってはじめて学的厳密性を獲得したといえる。しかしまたハイデガーの言葉を借りるならば、存在者の全体性を開示する「無についてなにつ知ろうとしない(1)」で、ひたすら「存在者の存在者を概念化する(2)」ことよって存在者とは何かを語るという意味において近代的学の資格を獲得したともいえよう(3)。

構造分析論の根本思想は、第一に作品の全体性についての把え方自身のうちにある。すなわち作品は実在的なものでも理念的なものでもなく意識によって志向的に成立するものであるが、一たび成れば実在的なものと類似的に存在者として対象化され、他の存在者から区別されうる。それはまた既に成ったものである以上、それ自体で自存する静態的完結相において示される。しかしまた第二に構造分析論が何を最下底におくかという点でも、その根本思想がうかがわれる。かれらは意義を優先させるにせよ語音を優先させるにせよ、一様に語を作品の最小単位と考える。語の集合は作品全体の中で機能化され、契機に変貌するとき、それらは内包や律動の構成素となる。そしてかれらは作品を既に成ったものとみなす結果、それ自身

既に存在者的である語以外のものを作品の中に見出すことができな
い。つまりかれらは作品という存在者を語というより低次の存在者
の連関として示すことで終る(4)。しかし私たちは作品をその都度
生成するものとして体験している。私は blanc という現象に着目
して、たえず生成する作品をその動態相において把え直す可能性を、
以下探つてゆこうと思う。

二、Blanc はいかなる言語現象にも常に見出される。それは生理
学的には発声組織に休止を与え、次の発声活動の準備にあてられる
ものであり、音声学的にいっても一つの発声から他の発声への転換
を円滑にするものである。それはまた文字の集合の中で余白として
示されている。こうした blanc はしたがって科学的にはさして積
極的な意義を有していないかに見える。事実生理学者や音声学者は
かりでなく、文法学者はこれを語や文法的連関に還元しているし、
文芸学者すら韻律や律動を扱う際に付随的に触れてきたにすぎない。
しかしそれが松や樹木やあるいは記号のように実在的に呈示されて
いないからといって、にわかには消極的に評価するわけにはゆかない
だろう。

時には blanc も句読点、中断符、疑問符、感嘆符等といった符
号によって表示されることもある。しかしこれらは本来発語に含ま
れている読者の発言態度から抽象された形式符号にすぎず、blanc
そのものを表示しているというよりは発語の一部分によつて blanc
を補充しているものとみるべきである。本来の blanc は語、文の
間にこそあれ、息をつくところさえ示しておらず、むしろなにか一
現実的なものに対応していないからこそ記号化を拒絶する。しかも
blanc は一回的な語や文の間に具体的に現在している。

三、言語は一般に日常の話、あるいは散文語、あるいは詩語としてしか現象しない。これら諸言語現象以前に言語が存在するわけでない。しかしまたこれらをなべて言語とよぶ以上、そこに言語の基本的性格が考えられてよい。これをつぎのように約言してもかまわないのではないか。すなわち言語は、ある者が既に形成された有意味的世界の中に自己を置きつつ（話者となつて）、その中で他の者（聴者）に対して特定の事柄を意味において指示するときに成立する、と。その際発語される言語はすべて意味を担う記号の働きをする。だがここでいう記号はなにかを表現するための手段とか道具ではなく、丁度私が顔を真赤にして相手に掴みかかるとき顔の赤さと手の威嚇的運動は怒りの表現そのものであるのと同様に、表現、伝達そのものである。言語によって表現される事柄は話者以前に存在するものではなく、意味づけの中ではじめて成立してくる。言語はこの意味づけという連関関係そのものである。しかしこの意味での言語には、発語だけでなく沈黙もまた所屬している。聴者の沈黙は話者の特定の事柄への意味づけの関係を同意したり拒絶したりすることによって、話者と同じか異なつた意味づけの關係に立っているからである。しかしまた発語だけでも沈黙だけでも言語は成立しない。話者の発語は常に聴者に聴者の沈黙に己れを曝し、この沈黙によって己れの意味づけを確定してゆくことができるからであり、沈黙もまた常に発語を引き受けるものとしてしかありえないからである。

四、こうした全体現象の中にあつて、しかし発語は言語において独特の位置を占めている。このことは失語症の患者が要するに言語活動一般の無能者であるという一事からでも明かである。語や文は事態の形像を喚起したり判断を提起したりすることによって、事態を

意味において指示する。語や文は phoneme と moneme との密接な関与によってこの機能を果している。しかしこれら語と語、文と文との間に phoneme と moneme を共々拒絶する間が介在している。ただしここでいう間は沈黙と同一視されてはならない。沈黙が前面に現れてくるのは、発語が己れの意味づけの關係の確定を沈黙に委ねるときである。間は、発語が常に沈黙に対して己れを曝しながらいまだそれに己れを委ねることに抵抗しているというそのもつとも緊張した頂点に立っている。間は発語の側にある。

この間がいかにかに処理されるかによって諸種の言語現象が現れてくる。まず日常語においては、間は非言語的行動によって補充されてゆく。その結果発語は身振りや表情と等価となり、「六本日の指、三本目の足、要するにわれわれ自身に同化される純粹機能」⁽¹⁾となり、非言語的行動を含めたより広義の有意義的連関の中の特殊な契機に変貌してゆく。論理的文章の言語にあっては、間は論理的關係として実体化され、個々の語・文から独立した普遍的形式によって埋められてゆく。したがってこれら二種の言語現象にあっては、間は他の実体的なものによって補充され、間そのものとしては除去されてゆく。これに反して詩語における間はつぎの点で前二者と異なっている。すなわち、それは、(一)自己を埋めるためのいかなる実体物をももつておらず、(二)自己を縁どる具体的な語や文との直接的關係においてしか示されえないそれ自身具体的な現象である。詩語においてのみ間は間として現れる。これを私は blanc とよぶ。

五、詩語にあって発語と沈黙は他のいかなる介在物をも導入しないで直接向い合っている。その緊張の頂点に blanc が位していることは先にのべた。それはまず発語の側にある。だが正確にいえばそ

それは既に発語ではない。それは沈黙のまなざしがひしひしと発語に向ってせめぎよせてくるのを一身に引き受けているからである。だが更にそれは発語でも沈黙でもない。発語も沈黙も現実的事態（それが外的事物であれ内的情態であれ）に対して指示連関をもっている。これに反して *blanc* はこうしたものをなにより一つ指示しないで、逆にその指示連関を拒絶する。更に意味づけが発語と沈黙の指示連関のあり方だとすれば、それは意味をも否定している。かえってそれは、それをとおして発語と沈黙とを等根源的に根拠づける発語地平へと私たちを誘ってゆく現象である。これによってきりさかれた発語の割け目に根源的言語地平が開示され、この地平の上に発語ははじめて発語として（身体的表現としてでなく）生成してゆくことができる。Blanc は言語地平の開示の生成に対して同時に責めを負う独特の現象である。ただしここでいう地平は事物的存在者でも有義的連関の中の道具的存在者でもなく、その意味からいえば無ではない。しかしそれは単なる欠如ではなく、それによって存在者（発語）がはじめてそれとして有義的になるような無である。それは決して規定されることはないが、存在者の有義性を意味づけるようにしてその都度既に開示されている。しかもこの地平が端的に現れてくるのは既にあった存在者の有義的連関が根こそぎにされる不安現象においてである。Blanc は発語が既に有していた現実的事態との有義的連関を根こそぎにすることによって地平を開示し、この根源的言語地平の上にはかなくはあるが純正の（言語として）新たな有義性をもった発語を生成させる⁽⁵⁾。

しかし一層重要なことは *blanc* が意識の現象だということである。意識は現在をこそ *explicit* にするが、その背後に未来と過去

への志向を含めた無限の流れである。したがってそこから開示される言語地平も、後者の上に生成する発語もこうした意識の変様を受けざるをえない。その意味で *blanc* によって生起してくる詩的言語はサルトルが指摘したように、一種の不透明さを帯びてこざるをえない。しかしこの不透明さは意識それ自体に備わるものであって、反照の「味」しか呈示しない「もの」の閉鎖性から生じてくるものではない⁽⁶⁾。Blanc は詩語の地平を開示しつつ、同時に詩語をそのものとして生成させる。

- (1) M. Heidegger : Was ist Metaphysik, S. 27.
- (2) a. a. o., S. 44.
- (3) Vgl. R. Ingarden : Das literarische Kunstwerk ; W. Kayser : Das sprachliche Kunstwerk. なおインガルデンの著書には対象性のある方として実在的に対立させて「無」に言及している箇所が見出されるが、かれのいう「無」は、ハイデガーの意味での不安において開示される無とは全然別である。
- (4) J.-P. Sartre : Qu'est-ce que la littérature ? dans : Situation II, p. 71.
- (5) Vgl. M. Heidegger : op. cit., S. 30ff.
- (6) cf. J.-P. Sartre : op. cit., p. 68 ; pp. 85-87.
- (7) 本小論は、単に記号的な語・文からいかにして詩語が生成してくるか *blanc* という不安現象を手がかりにして考察したものである。したがって自然的時間によって計量されうる休止期間とは無縁である。時間的計量は *blanc* に対する存在者の抽象である。最後に補足すれば、私が言語地平とよんだものは気分化されて、余情、幽玄、さび等といった詩美の日本の理念に連ってゆくように思われる。これに関しては新たな論及が必要であらう。

(東京大学)